

英語プレゼンテーション不安をいかに解消するか ー福山市立大学2年生に対するアンケート結果からー

後藤 悠里 牧田 幸文

要旨

グローバル化社会の中で、知識や意見を英語で発信する必要性が日に日に高まっている。そこで、本学においても、講義を通して、英語プレゼンテーション能力の育成が図られている。しかし、本学学生がプレゼンテーションに対して大きな不安を抱えていることが推測できる。本稿では、福山市立大学の学生が持つ、プレゼンテーション不安の解消方策について検討することを目的とする。そこで、質問紙調査、その中でも特に、自由記述回答を分析の対象にする。

その結果、相対する者が英語で早口で話す場合や英文を書く際に、学生が不安を感じる事がわかった。また、学生は、プレゼンテーション時には、緊張し、聞き手に通じないかのではと不安になっていた。一方で、相手が良い反応をした場合や聞き手に通じた場合に嬉しいという気持ちを持っていた。さらに、学生は、他の学生のプレゼンテーションを聞くことが勉強になった、プレゼンテーションは今後の勉強や将来の仕事に有意義である、と答えた。自由回答記述からは、「不安に対する方策」「伝える気持ちが大切であること」「難しい英語を使わず、プレゼンテーションを楽しむこと」「自分主体であること」「自信を持つこと」という5つのカテゴリーが得られた。本研究により、今後のプレゼンテーション授業における有益な示唆が得られた。

キーワード：英語コミュニケーション不安、プレゼンテーション

1 背景と目的

グローバル化社会の中で、知識や意見を英語で発信する必要性が日に日に高まっている。さらに、コロナ禍によって、その傾向は加速している。日常生活において、オンライン会議が行われるようになった。明日、突然、海外の人たちと英語を話し、自分たちの研究や仕事についてプレゼンテーションしなければならないという状況も生まれつつある。

先行研究においては、1980年代から外国語学習不安についての研究が蓄積されている (Horwitz et al., 1986, Horwitz & Young eds., 1991など)。不安への対処法として、さまざまな方法が提案されている。たとえば、Matsuda and Gobel (2004) は、ペアワークやグループワークの導入や成功体験を経

験させることを、方法の一つとして挙げている。藤田ら (2009) は授業にプレゼンテーションを導入した結果、学生の自信が涵養されたと述べ、プレゼンテーションの意義を強調している。さらに、飯村 (2016) はプレゼンテーションコンテストの開催を通じて、学生の英語学習不安を低減させた実践活動を報告している。本学においても、講義やコンテストの開催を通して、英語プレゼンテーション能力の育成が図られているが、本学学生が大きな不安を抱えていることが推測できる。

本稿では、福山市立大学の学生が持つ、プレゼンテーション不安の解消方策について検討する。福山市立大学は英文学部や英語コミュニケーションの向上を主体とした学部がなく、一般教養の一部として学生たちは英語を学んでいる。つまり、学生たちは

必ずしも英語に強い関心があるわけではない。その点では、英語を教える教員との英語力の隔たりや心理的な隔たりがあり、学生が持つ英語学習への不安を教員は理解し難いところもある。先行研究では、学生と教員双方に行った調査において、教員が教える不安対処方法が役に立っていないという意見が、学生から挙げられている (Tran & Moni, 2015)。

ところで、英語学習場面では、教員と学生という関係に加え、学生同士という関係も存在する。同じような学力やバックグラウンドを持つ学生の意見から、学生が学ぶことは大きい (河内, 2012)。Huangら (2010) は、一緒に学ぶクラスメイトによって、英語学習に快適さがもたらされることを指摘している。しかし、ピアサポートに比べ、教員によるサポートのほうがより効果があったとも述べている (Huang et.al., 2010)。

このように、先行研究では、不安対処について、教員と学生、クラスメイトとクラスメイトの関係性の中のアドバイスだけでは不十分であることがわかっている。それでは、これまでの研究対象に加え、クラスメイトではなく、教員でもない存在として、すでにプレゼンテーションを経験した学生のアドバイスが参考になるのではないか。もちろん、教員によるアドバイスやクラスメイトによるサポートを否定するものではない。アドバイスの提供を行う人を増やすことで、アドバイスの種類を増やすことができるのではないか。

また、通常の調査では、得られた声は調査実施者に向けられたものである。調査もまた、相互行為であるため、調査実施者の影響を受けることとなる。そのために生じる弊害として、有益な意見が失われてしまう可能性がある。たとえば、調査実施者が不適切だと思われる回答を行うことを、調査対象者は避けてしまうかもしれない。ここでももちろん、これまでの研究を否定しているわけではない。完全に弊害を取り除くことは不可能であるが、弊害を少なくする工夫によって、声の種類を豊富にすることを考えたい。

そこで、本稿では、質問紙調査、主に、プレゼンテーションを経験した学生から未経験の学生へと向

けられた、自由記述回答を分析の対象とする。そのことにより、学生のプレゼンテーション不安を解決する方法を提示したい。

2 方法

本調査は、2019年度英語コミュニケーションB受講者全学生に対して、実施した。英語コミュニケーションBは都市経営学部・教育学部ともに、2年次の必修科目(1単位)であり、1学期から4学期まで開講されている。英語コミュニケーションBは筆者の一人(後藤)と外部講師、二人の講師が別々に担当しているが、シラバスは共通である(表1)。

表1 英語コミュニケーションBシラバス

授業科目名	英語コミュニケーションB 1クラス	授業コード	1GSE00621		
授業科目名(英語)	English Communication B				
担当教員名	後藤 悠里				
授業科目区分	共通教育科目-スキル科目-外国語				
履修区分(卒業条件)	必修	免許・資格	【小・幼・特交・保】必修		
配当年次・学期	2年-1期・2期(都市経営学部)	授業形態	演習	単位数	1.0
	2年-3期・4期(教育学部)				
本授業の到達目標(本授業で学生が身につけるもの・身につける力)					
総合英語で獲得した語彙と文法力、聴解能力をフルに活かして英語で自分の考えをまとめ発表することを目的とする。英語でプレゼンテーションを行うための文章・表現・調査方法を学ぶ。					
本授業の概要					
授業の前半では、英語で自己紹介を兼ねたIndividual Presentationの準備を行う。Individual Presentationでは、身近なトピックを選び、どのように効果的に英語で聴衆に伝えることができるのかを教える。					
英語で発表することに慣れ親しむことを目的とする。					
授業の後半では、Academic Presentationの準備を行う。					
各学生が専門教科で学んだ興味あるトピックを選択し、各自(もしくはグループ)8分間のプレゼンテーションを行う。研究調査方法・アカデミックライティング、アカデミックプレゼンテーションの方法を教える。					

本授業の到達目的は、「総合英語で獲得した語彙と文法力、聴解能力をフルに活かして英語で自分の考えをまとめ発表することを目的とする」「英語でプレゼンテーションを行うための文章・表現・調査方法を学ぶ」である。授業では、学生はそれぞれ前半・後半で2つのプレゼンテーションを行う。第1のIndividual Presentationでは身近なトピックを選ぶことができる。第2のAcademic Presentationでは、各学生が専門教科で学んだ興味あるトピックを選択し、グループで発表を行う。すべての学生はプレゼンテーションを2回行うとともに、クラスメイト(25名程度)のプレゼンテーションを聞く機会を持つ。

2019年度から英語コミュニケーションB受講者に対して、継続的にアンケート(「大学生の英語プレゼンテーション能力向上のための調査」)を行っ

ている。それぞれの授業の最終授業終了後に、アンケート用紙を配布し、記入してもらった。調査は無記名とし、回答者を特定できないようにしている⁽¹⁾。受講者259人のうち、都市経営学部102名、教育学部84名から調査協力の同意を得て、調査票を回収した(回収率71.8%)。なお、本調査は、福山市立大学倫理委員会の承認を得て実施されている。

調査においては、英語に関する意識(英語についての考え、英語プレゼンテーションについての考え、英語プレゼンテーション時の気持ち)、性格に関する自己評価、プレゼンテーション(日・英)の経験、海外滞在経験、TOEICの成績、読書時間、プレゼンテーションをする学生へのアドバイスについて、質問項目を設けた。調査票に関しては、本学の実態に合わせ、近藤・楊(2003)を、一部改変して使用した。

3 結果

ここでは、アンケート調査の中から、TOEICの得点分布、英語に関する意識についての調査項目および自由回答記述の結果を示す。

3.1 TOEIC得点分布

アンケートにおいては、TOEICの点数を自己申告

で報告してもらっている。選択肢は100点刻みで構成している(200点未満, 900点以上の選択肢を除く)。有効回答183名のうち、未受験者はいなかった。得点分布を図1に示す。中央値は400点台、最頻値は500点台である。TOEICを主催している「一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会」が発行している2019年度データによると、IPテスト⁽²⁾を受験した大学2年生101,299名の平均スコアは455点であった(一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会, 2020)。福山市立大学の学生の平均スコアは、日本全国の大学2年生の平均に近い。

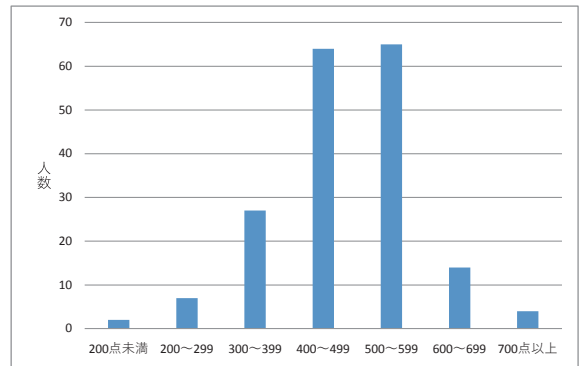


図1 TOEIC得点分布

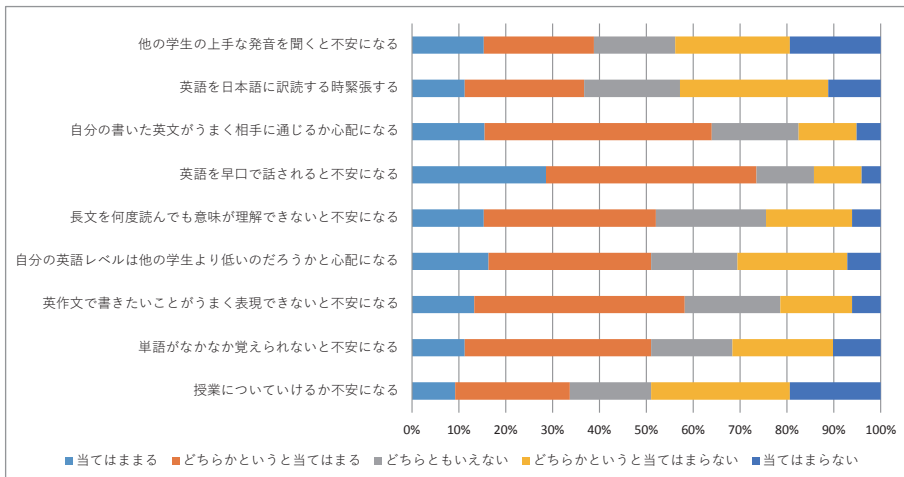


図2 英語についての考え (都市経営学部)

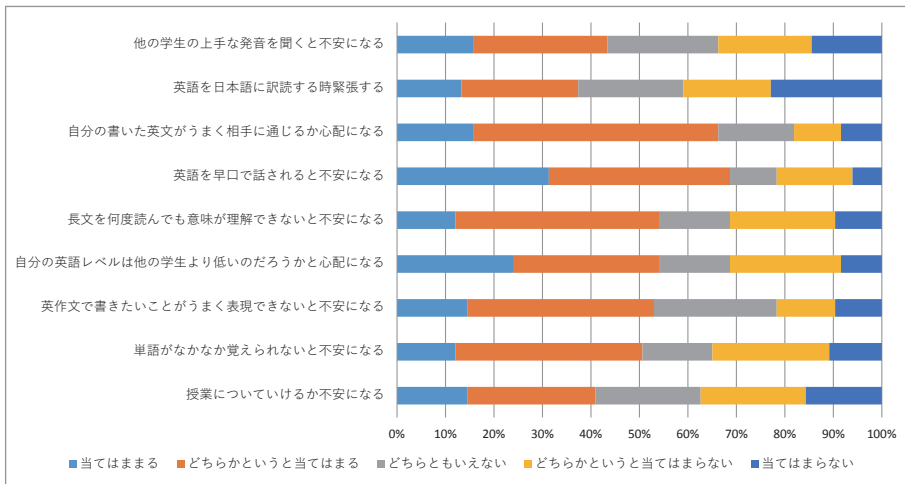


図3 英語についての考え（教育学部）

3.2 英語についての考え

英語についての考えを尋ねる具体的項目は、「他の学生の上手な発音を聞くと不安になる」「英語を日本語に訳読する時緊張する」「自分の書いた英文がうまく相手に通じるか心配になる」「英語を早口で話されると不安になる」「長文を何度読んでも意味が理解できないと不安になる」「自分の英語レベルは他の学生より低いのだろうか心配になる」「英作文で書きたいことがうまく表現できないと不安になる」「単語がなかなか覚えられないと不安に

なる」「授業についていけないか不安になる」の9項目である。

都市経営学部・教育学部双方に共通して「当てはまる」の割合が60%を越えたのは、「自分の書いた英文がうまく相手に通じるか心配になる」「英語を早口で話されると不安になる」であった（図2・3）。

3.3 英語プレゼンテーション時の気持ち

英語プレゼンテーション時の気持ちを尋ねる具体

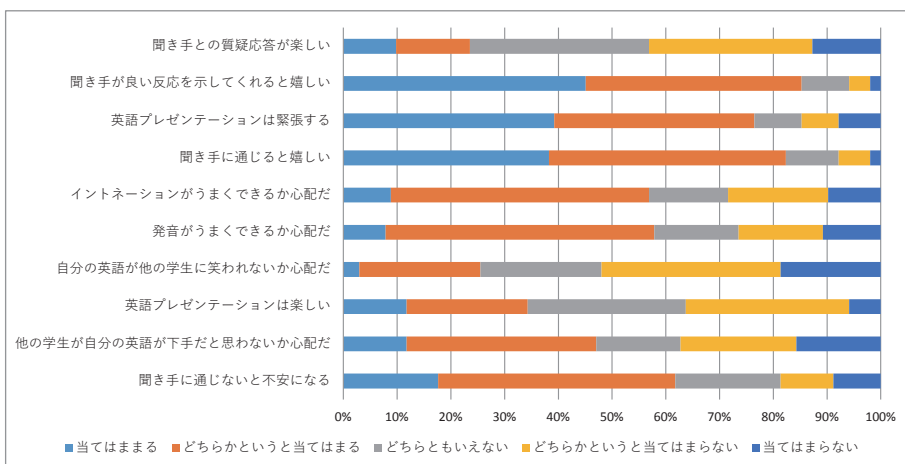


図4 英語プレゼンテーションをする時の気持ち（都市経営学部）

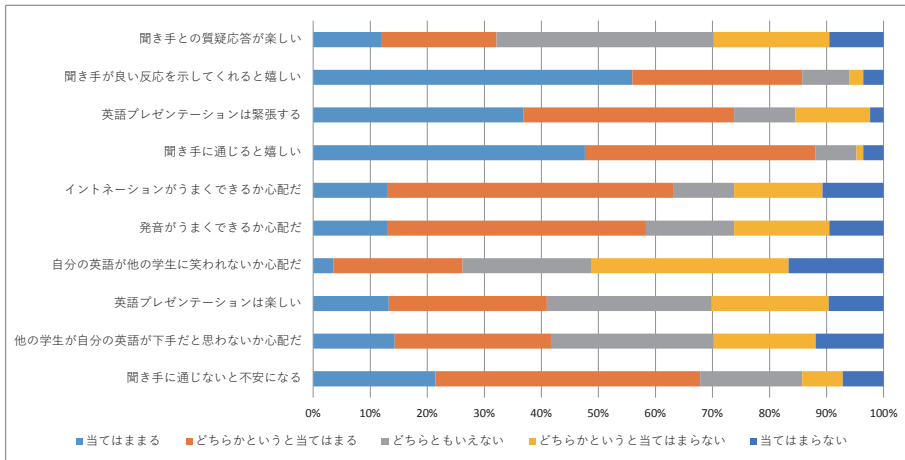


図5 英語プレゼンテーションをする時の気持ち (教育学部)

的項目は、「聞き手との質疑応答が楽しい」「聞き手が良い反応を示してくれると嬉しい」「英語プレゼンテーションは緊張する」「聞き手に通じると嬉しい」「イントネーションがうまくできるか心配だ」「発音がうまくできるか心配だ」「自分の英語が他の学生に笑われないか心配だ」「英語プレゼンテーションは楽しい」「他の学生が自分の英語が下手だと思わないか心配だ」「聞き手に通じないと不安になる」の10項目である。

都市経営学部・教育学部双方に共通して「当てはまる」の割合が60%を越えたのは、「聞き手が良い反応を示してくれると嬉しい」「英語プレゼン

テーションは緊張する」「聞き手に通じると嬉しい」「聞き手に通じないと不安になる」の4項目であり、教育学部においては、「イントネーションがうまくできるか心配だ」が63%であった(図4・5)。

3.4 英語プレゼンテーション経験について

英語プレゼンテーション経験についての考えを尋ねる具体的項目は、「英語を使うことに対する自信がついた」「日本語のプレゼンテーションを行うことに対する自信がついた」「機会があれば、英語プレゼンテーションをこれからもしてみたい」「この経験は将来の仕事に有意義だと思う」「この経験は今後の勉学に有意義だと思う」「他の学生の上手な英語プレゼンテーションを聞いて勉強になった」

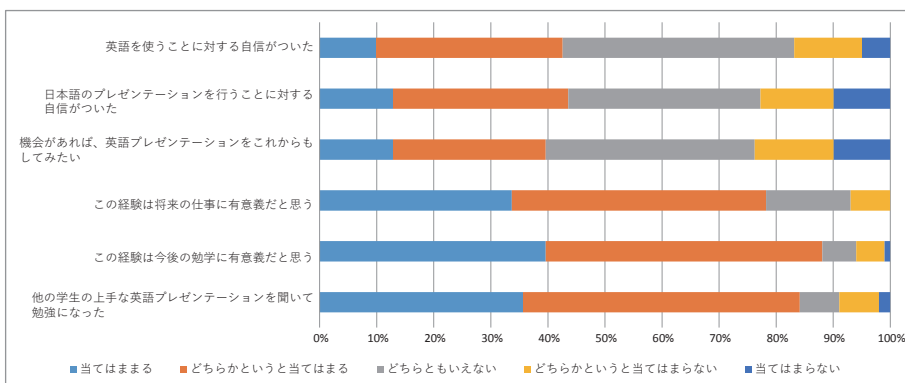


図6 英語プレゼンテーションの経験についての考え (都市経営学部)

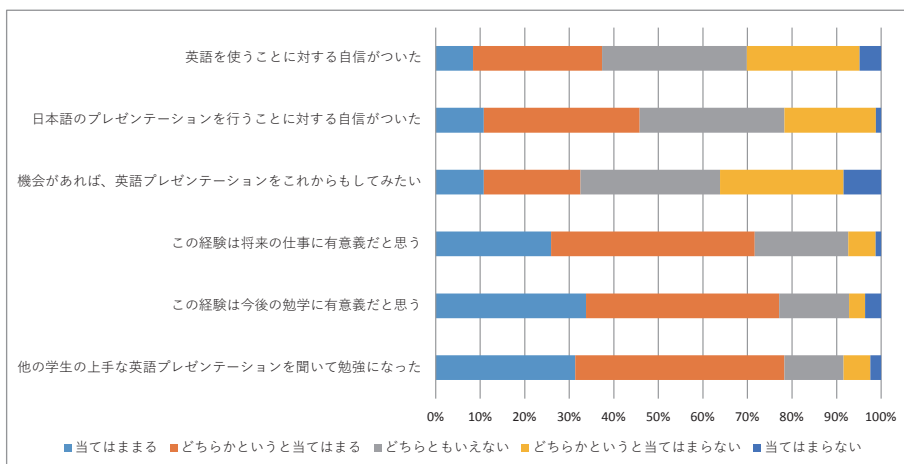


図7 英語プレゼンテーションの経験についての考え (教育学部)

今後の勉学に有意義だと思う」「他の学生の上手な英語プレゼンテーションを聞いて勉強になった」の6項目である。

都市経営学部・教育学部双方に共通して「当てはまる」の割合が60%を越えたのは、「この経験は将来の仕事に有意義だと思う」「この経験は今後の勉学に有意義だと思う」「他の学生の上手な英語プレゼンテーションを聞いて勉強になった」の3項目であった(図6・7)。

3.5 他の学生に向けたアドバイス

英語プレゼンテーションを今後行う学生に対するアドバイスを自由回答式で書いてもらった。具体的には「英語プレゼンテーションをすることに不安を感じる学生に対して、あなたならどのようなアドバイスをしたいと思いますか。以下の欄に、自由にお書きください」と尋ねた。

得られた自由記述データについては、誤字を修正し、複数の表記方法がある方法を統一化した。修正したデータの分析にはKH Corderを用いた。KH Corderは質的データを統計的データとして示す。本ソフトウェアを使用することにより、質的データの持つ傾向をより客観的に把握することができる(樋口, 2020)。

自由回答について、89人から回答があり、108

文を対象とした。5つ以上の文書で使われている単語を示したのが、表2である。もっとも出現数が多かったのは、「英語」の15回であり、以下、「大丈夫」「伝える」「練習」(それぞれ14回ずつ)、「自信」「自分」(それぞれ12回ずつ)、「伝わる」(11回)と続く。

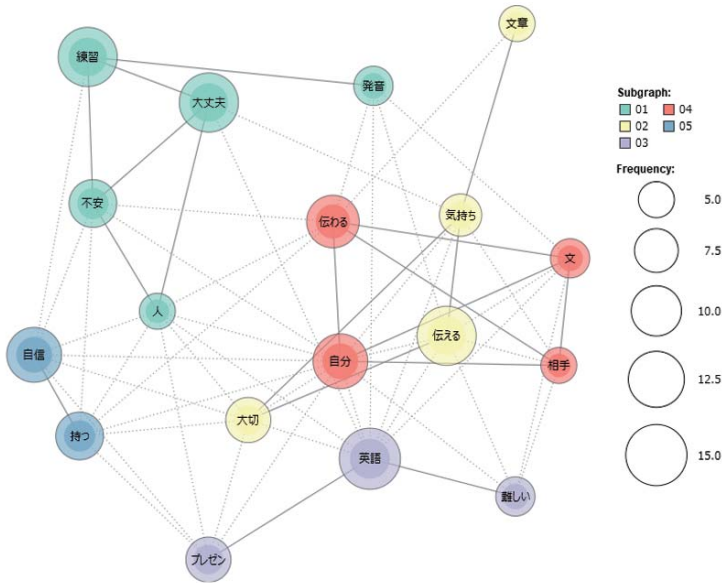
自由記述において、どのような単語とどのような単語が関連しているのだろうか。5つ以上の文書に出現した単語について、共起ネットワークという方法を使って得られたのが表3である。円の大きさは単語の出現頻度を、そして、円をつなぐ線の太さは単語間の関連の強さを示している。

表2 回答中の頻出単語 (出現文書5つ以上)

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
英語	15	大切	8
大丈夫	14	気持ち	7
伝える	14	難しい	6
練習	14	発音	6
自信	12	文	6
自分	12	間違える	5
伝わる	11	人	5
持つ	9	相手	5
不安	9	文章	5
プレゼン	8		

以下では、それぞれのカテゴリーごとに、どのような単語が含まれているかを示したうえで、どのよ

表3 英語プレゼンテーションのアドバイスに関する自由記述回答の共起ネットワーク



うなアドバイスがあるのかを分析する。なお、引用については、原文の通りに表記する。また、重複して取り上げられている回答が存在する。

3.5.1 カテゴリー 1

「大丈夫」「練習」「不安」「発音」「人」といった単語が共起している。表3では、緑色の円で示されている。なお、「不安」という単語は質問文にあるため、頻出している可能性が高い。具体的には以下のようなアドバイスがあった。

「大丈夫」＋「練習」

練習したら大丈夫。
何度も練習すれば大丈夫。
たくさん練習すれば大丈夫だと思います。

「大丈夫」＋「不安」

「不安を感じる人はあなた1人だけじゃないから大丈夫ですよ。」とアドバイスしたいと思います。
みんな不安に思ってるから大丈夫。
皆も不安がっているから大丈夫。

「練習」＋「発音」

話すスピードはゆっくりでもいいから、発音やアクセントが正しく言えるように練習した方がいい。
練習を繰り返して行う、英語の発音を確認する。

3.5.2 カテゴリー 2

「伝える」「大切」「気持ち」「文章」という言葉が共起している。表3では、黄色の円で示されている。

「伝える」＋「大切」

簡単な英文で分かりやすく伝えることが大切である。
英語の良し悪しよりも、伝えようとする気持ちが大切。

伝えよう！という気持ちが大切だと思います。

「伝える」＋「気持ち」

大事なのは伝えようとする気持ち。
英語の良し悪しよりも、伝えようとする気持ちが大切。
自分のペースで一番伝えたいことを相手に伝えようとする気持ちが大事！
伝えたい気持ちがあれば大丈夫！
伝えよう！という気持ちが大切だと思います。

「大切」＋「気持ち」

英語の良し悪しよりも、伝えようとする気持ちが大切。
伝えよう！という気持ちが大切だと思います。

3.5.3 カテゴリー 3

「英語」「プレゼン」「難しい」といった単語が共起している。表3では、紫色の円で示されている。

「英語」＋「難しい」

難しいことを考えずに自分が表現できる英語で伝え

るべき。

難しい英語を話す必要はない。

難しい英語，単語を使おうとしないこと。

難しく言う必要はない，自分の伝えたいことをそのまま英語で伝えたい。

「英語」＋「プレゼン」

英語でプレゼンできるとか格好いいと思ひ込む。

自分の英語に自信を持って，プレゼンを楽しむことが大切！

3.5.4 カテゴリー4

「自分」「伝わる」「文」「相手」という言葉が共起している。表3では，赤色の円で示されている。

「自分」＋「伝わる」

英語だから不安でやりたくない，と言って逃げず，下手でも良いので人に自分のメッセージが伝わるよう積極的にやってみよう。

自分の知ってる単語を使えば上手に相手に伝わる。人に伝わるか不安であっても，自分が堂々としていれば大体のニュアンスは伝わるから自身〔原文ママ〕を持ってハッキリと。

自分分かる文を作れば相手に伝わる。

「伝わる」＋「文」

自分分かる文を作れば相手に伝わる。

「文」＋「相手」

難しい文を考えるより，中学生レベルの文を並べた方が自分も相手もわかりやすい。

自分分かる文を作れば相手に伝わる。

「相手」＋「伝わる」

自分の知ってる単語を使えば上手に相手に伝わる。

自分分かる文を作れば相手に伝わる。

3.5.5 カテゴリー5

「自信」と「持つ」という単語が共起している。

表3では，青色の円で示されている。

「自信」＋「持つ」

何度も練習をして，自信を持ってやればいいと思う。

自信を持って欲しい。

自信持て。

人に伝わるか不安であっても，自分が堂々としていれば大体のニュアンスは伝わるから自身〔原文ママ〕を持ってハッキリと。

練習してきたので自信をもつ。

もっと自信もって！

間違ってもいいから自信を持つ。

自信を持って大きい声で!!

自信を持って話せば大丈夫。

自分の英語に自信を持って，プレゼンを楽しむことが大切！

4 考察

ここまで，本学学生の英語についての意識に関する質問項目結果と自由記述回答を概観した。その結果，自分が英文を書く際や相手が早口で話す際に，学生が不安を感じる事がわかった。また，プレゼンテーション時には，緊張し，聞き手に通じないか不安になっていた。一方で，相手が良い反応をしてくれた場合や聞き手に通じたと感じた場合に，嬉しいという気持ちを持っていた。さらに，他の学生のプレゼンテーションを聞くことにより，勉強になり，今後の勉強や将来の仕事に有意義であると答えた。学生の自由記述回答からは5つのカテゴリーが見出された。それぞれを考察したうえで，学生が想定する学生像と英語教員からの隔たりについても示すこととする。

4.1 各カテゴリーの考察

4.1.1 不安に対する方策

「大丈夫」「練習」「不安」「発音」「人」といった単語が共起するカテゴリー1を「不安に対する方策」と名付ける。「不安」を持つであろう学生に対し，「大丈夫」という声や「練習すればよい」とい

う声がかけている。これらの声を受け入れることで、これからプレゼンテーションをする学生は安心することができるとともに、具体的に何をしなければならないのかわかるだろう。

先に述べたように、外国語学習不安については多くの研究の蓄積がある。外国語学習不安を対象とする研究者の間では、学生が外国語学習不安を持つことは当たり前のこととして捉えられてきた。

しかし、学生は、「みんな」が不安を持っていることを、他の学生に伝えようとしている。裏を返せば、不安を持っている「みんな」の存在を、気づいていない学生たちがいるのだ。少なくとも、こうした回答をする学生にとっては、他の学生が不安を抱えていることは、自明ではなかったのであろう。プレゼンテーションに臨む学生には、他の学生はあたかも自信満々に見えるのかもしれない。

自由記述回答の結果から、学生は他の学生が不安を持っていることを知らない可能性があるという知見が得られた。したがって、他の学生が不安を持っていることを知る機会を授業内に設けることが、不安解消の一つの方策として考えられる。たとえば、安心できる環境を教員が構築したうえで、学生同士で不安について自由に語る機会を設けることができるだろう。

事前準備が不安の軽減に効果的であることは、先行研究においても指摘されている (Horwitz et al., 1986)。先行研究と一致したアドバイスである。

4.1.2 伝える気持ちが大切であること

「伝える」「大切」「気持ち」「文章」といった単語が共起しているカテゴリ-2を「伝える気持ちが大切であること」と名付ける。学生は、伝えようとする気持ちが大切であると、他の学生たちにアドバイスをしている。

先行研究においては、クラスメイトの前での発表は不安を誘発することが指摘されている。Price (1991)によれば、学生は、クラスメイトに笑われる、馬鹿にされる、発音を間違える、コミュニケーションをうまく取れないこと等を恐れているという。本学学生もまた、「3.3 英語プレゼンテーシ

ョン時の気持ち」で明らかになったように、プレゼンテーション時には緊張し、聞き手に通じない場合に、不安を感じる。

また、「英語の良し悪しよりも、伝えようとする気持ちが大切」という回答から、学生が、「英語が良くないこと」を気にしていることがわかる。つまり、自分の英語力に自信を持つことができない学生がいる。少なくとも、回答者はそうした学生が存在していることを想定している。

「伝える気持ちが大切であること」というカテゴリ-1は、英語力ではない「何か」を学生は感じていることを示している。しかしながら、ここで「何か」と表現したように、「伝える気持ち」とは曖昧なものである。「伝える気持ち」の内実、たとえば、学生たちがどういった行為から「伝える気持ち」を感じたのかについて、明らかにすることにより、効果的なプレゼンテーション指導を行うことができるだろう。

4.1.3 難しい英語を使わず、プレゼンテーションを楽しむこと

「英語」「プレゼン」「難しい」といった単語が共起しているカテゴリ-3を「難しい英語を使わず、プレゼンテーションを楽しむこと」と名付ける。

「英語」「難しい」双方が出現している回答において、「難しい」という単語は、実際には、「難しくない」という否定形で用いられている。「英語」「プレゼン」双方が出現している回答においては、「格好いい」「楽しむ」と、プレゼンテーションを肯定的に捉えようとする姿勢が示されている。「プレゼン」「難しい」という単語が「英語」という単語を媒介に結びついている。結びついているとはいえ、「難しい英語を使わないこと」と「プレゼンテーションを楽しむこと」の間に関係性を見出すことはできない。カテゴリ-3は、英語を使う時の、二つの異なる技法について、述べているといえよう。学生は大学受験やTOEICの勉強をする中で、難しい単語や文法を学んできた。「難しい英語を話す必要はない」という回答からは、学生の中に、難しい単語や文法を使うことへの囚われがあることが読み取

れる。試験用の単語とプレゼンテーション用の単語が違うことは、英語を話すことのできる教員にとっては自明であるかもしれない。しかしながら、学生はそのことを知らない可能性がある。プレゼンテーションにおいて、難しい英文を使う必要はないことを、教員は伝えていく必要がある。

また、学生自身は、英文を作ろうとするときの習慣を自覚している。「難しいことを考えずに自分が表現できる英語で伝えるべき」「難しく言う必要はない、自分の伝えたいことをそのまま英語で伝えたい」という回答からは、日本語で考える時の習慣への気付きを読み取ることができる。母国語である日本語では、抽象的な概念も自由に表現することができる。しかし、インプット量、アプトプット量ともに圧倒的に少ない英語においては、日本語で普段使っている言い回しを、そのまま伝えて相手に理解してもらうことは非常に困難である。自分の中にある、回答において、日本語と英語との表現力の隔たりに気付き、英語力に合わせる必要性が指摘されている。こうした気付きをもたらず機会を、プレゼンテーションの前段階で、学生たちに提供する必要があるだろう。

「英語」「プレゼン」双方が出現する回答には、プレゼンを「格好いいと思ひこむ」ことや「楽しむ」ことがある。学生の中には、プレゼンテーションに対して、やはり否定的な感情があるのだろう。これらの回答は、プレゼンテーションを乗り切る技法として、プレゼンテーションに対する認知を、無理やりにでも変容させる方法を示している。

4.1.4 自分主体であること

「自分」「伝わる」「文」「相手」といった単語が共起しているカテゴリー4を「自分主体であること」と名付ける。「伝わる」という単語は、小学館『デジタル大辞泉』によれば、「話などが一方から他方へ通じて広がる」とある。学生の回答においては、自分（発表者）から相手（観客）へという流れが描かれている。

「3.2 英語に関する一般的イメージ」で述べたように、「英語を早口で話されると不安になる」学

生たちは、相手のペースに巻き込まれてしまっている。英語に圧倒され、思考が止まる経験は外国語学習者にとっては共通の経験としてあるだろう。

相互行為であるコミュニケーションにおいて、理解していない相手に早口で話すことは不適切である。わからないのは聞き手の問題だけではなく、話し手の問題でもある。しかし、英語においては、そのことが忘れられ、わからないことへの自責が起こることがある。

「自分主体であること」にカテゴライズされた回答は相互行為が話し手、聞き手双方によって行われることを理解したうえで、話し手、つまり自分の重要性を示すものである。「英語だから不安でやりたくない、と言って逃げず、下手でも良いので人に自分のメッセージが伝わるよう積極的にやってみよう」「人に伝わるか不安であっても、自分が堂々としていれば大体のニュアンスは伝わるから自信を持ってハッキリ」という回答に共通するのは、相互行為の主導権を自分に引き戻すことである。

4.1.5 自信を持つこと

「自信」「持つ」といった単語が共起しているカテゴリー5を「自信を持つこと」と名付ける。自信を持つことの重要性はさまざまな学生から語られている。

ここで興味深いのは、「自信」と「持つ」について、強い関連を持った単語が存在していないことである。ここからわかるのは、学生たちが、「発音」や「イントネーション」のような個々の技法ではなく、発表者の態度なども含めて、総合的にプレゼンテーションを見る視点を得ていることである。

また、「自信を持って欲しい」「もっと自信もって!」「自信を持って大きな声で!!」という声は学生の暖かい励ましが感じられる。学生たちは、他の学生のプレゼンテーションを積極的に受け入れようとしている。ここに、「寛容」を読み取ることができる。

私たちは母語のやり取りの中で、相手のミスを見つけたとしても、総合的に相手の発言内容を評価している。日々のやり取りの中で、個別具体的な欠点

を指摘することはほとんど行われぬ。「総合的な観点」「寛容」はグローバル化時代のコミュニケーションにおいて、非常に大切であり、相手の話す内容を読み取ろうとする姿勢が見られる。

ただし、「自信」「持つ」と強い関連を持った単語が存在しなかった理由は、学生自身が、自信を持つ具体的な方法を知らなかったから、であることも考えられる。自信を持つとはどういったことなのか、どのような行為があれば自信を持っているといえるのか、どうすれば自信を持たせられるのか等、さらに深めるべき課題は多い。

4.2 福山市立大学生の自画像

学生はアドバイスされる相手を想定しながら、自由回答記述を記入したと考えられる。自由回答記述からは、福山市立大学生の自画像を読み取ることができるだろう。そして、自画像は教員の見えている像とは違う可能性がある。福山市立大学生の自画像とは、どういったものなのだろうか。

自由記述回答の中に見られる、福山市立大学生の英語学習者としての自画像は、まじめで優しいと表現することが可能だろう。まず、まじめだからこそ、不安を持ち、自分の英語力や技法が不十分であると感じてしまう。そして、周りもまじめな学生たちなので、不安をなかなか打ち明けられない。また、福山市立大学生は、優しい。相手の気持ちを汲み取ろうという姿勢があるからこそ、他者に圧倒されてしまうことがある。

「不安に対する方策」「伝える気持ちが大切であること」「難しい英語を使わず、プレゼンテーションを楽しむこと」「自分主体であること」「自信を持つこと」というアドバイスにおいて、福山市立大学生のそれまでの英語に対する姿勢を変容させることが意図されていると考えることができる。

4.3 英語教員との隔たり

「1 背景と目的」において、英語教員は学生とは隔たりがある可能性があると述べた。具体的にどのような隔たりがあり、どのように対処していけばよいのかについて、言及する。

英語教員⁽³⁾もまた、英語学習者の一員であり、学生たちの辿っている道程は、英語教員がすでに経験してきたものである。しかし、英語教員が学生の気持ちを理解することは難しいように思われる。英語教員は、一般的に、英語を話すことができる人たちである。また、さまざまな学生を指導してきた経験を持っている。さらに、論文なども読んでいる。教員の持つ英語力と経験が、学生理解を遠ざけている可能性について、指摘しておきたい。

本調査からわかったことは、英語教員の持つ「盲点」である。学生が不安を抱えていることは、先行研究においては、自明のことである。数多くの学生を見ていけば、彼らが不安を持っていることに気付いている。しかしながら、不安を抱えているのは自分だけだと学生が感じ、さらに不安を拡大させていることに、英語教員は気づくことが難しい。

英語教員のように、英語を日常の中で話した経験があれば、知っていても自分では発することのできない単語があることは知っている。日常生活の中で使われる単語とそうではない単語を経験から知っている。しかしながら、学生には、その区別がつかない。

先行研究において、管見の限り、英語教員の持つ認識を対象にしているものはなかった。本研究で明らかになった「盲点」は、一例に過ぎないだろう。英語教員は、英語「を」教えるだけではなく、英語「について」、自分と英語の関わりも含めて、学生に伝えていくことが重要ではないか。

5 結論

本稿では、福山市立大学学生による、プレゼンテーション不安に対するアドバイスを中心に考察した。結果として、「不安に対する方策」「伝える気持ちが大切であること」「難しい英語を使わず、プレゼンテーションを楽しむこと」「自分主体であること」「自信を持つこと」という5つのアドバイスを得ることができた。これらのアドバイスは、福山市立大学生に対して、これまでの英語に対する姿勢を変容させようとするものとなっていた。類似の特徴

を持つ学生からのアドバイスは、今後、プレゼンテーションを行う学生にとって有益なものとなるだろう。

学生からのアドバイスは、英語教員にとっても、自らの認識を問い直すものとなっている。その一つとして、「不安に対する方策」として、不安を共有することの必要性が示された。外国語学習・コミュニケーション不安は、この分野の研究者にとって自明であるが、学生にとっては、伝えたいメッセージとなっていた。

本研究は、先行研究が対象としていた「教員－学生」、「学生（クラスメイト）－学生（クラスメイト）」の関係性だけでなく、「学生（プレゼンテーションを経験している学生）－学生（プレゼンテーション未経験の学生）」の関係性を考察の対象にすることで、アドバイスの種類を多様にするとともに、不安の解消方策の数を増加させるために行われた。学生の英語プレゼンテーションに対する意味づけを検討することは、学生にとっても、教員にとっても、実りの多い成果をもたらす。

本稿では、抽象的な単語が意味する内容を深く検討することや、学生の相違に合わせた細かい分析（英語力や性格など）、外国語の楽しみ（Foreign Language Enjoyment）についての検討を行わなかった。これらの検討は、今後の研究課題として重要である。特に、外国語の楽しみについての研究は、近年見られるようになってきている。これらについては、稿を改めて論じたい。

現在の社会において、英語によるコミュニケーション能力の高い人材の育成が求められている。学生の声を英語教育に取り入れることにより、グローバル化が進む社会に適した人材育成に貢献できると考えている。

注

- (1) 追加調査に協力すると回答した学生については、氏名とメールアドレスを書き留めている。
- (2) TOEIC Listening & Reading Testには「公開テスト」と「IPテスト」の2種類がある。IPテストとは「団体特別受験制度（Institutional

Program）」の略である。本学では年2回、IPテストの受験機会を学生に提供している。

- (3) ここでは、英語教員として、英語を第一言語としない者を想定している。

参考文献

- 飯村文香, 2016, 「日本人英語学習者のプレゼンテーションと不安－プレゼンテーションコンテストの効果検証」『関東甲信越英語教育学会誌』30: 71-84.
- 一般法人国際ビジネスコミュニケーション協会, 2020, 「Data & Analysis 2020: 2019年度受験者数と平均スコア」(2020年9月22日取得, https://www.iibc-global.org/library/default/toeic/official_data/pdf/DAA.pdf).
- 河内智子, 2012, 「学生によるプレゼンテーションをリスニングの授業に導入する意義」『成蹊大学一般研究報告』46: 1-19.
- 近藤真治・楊瑛玲, 2003, 「大学生を対象とした英語授業不安尺度の作成とその検討」『JALT Journal』25(2): 187-196.
- 樋口耕一, 2020, 『社会調査のための計量テキスト分析(第2版)』ナカニシヤ出版.
- 藤田玲子・山形亜子・竹中肇子, 2009, 「学生の意識変化に見る英語プレゼンテーション授業の有用性」『東京経済大学人文自然科学論集』128: 35-53.
- Horwitz, E. K., M. B. Horwitz & J. Cope, 1986, "Foreign Language Classroom Anxiety," *The Modern Language Journal*, 70(2): 125-132.
- Horwitz, E. K. & D. J. Young eds., 1991, *Language Anxiety: From Theory and Research to Classroom Implications*, Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice Hall.
- Huang, S., R. Eslami & R. S. Hu, 2010, "The Relationship between Teacher and Peer Support and English-Language Learners' Anxiety," *English Language Teaching*, (3)1: 32-40.
- Matsuda, S. & P. Gobel, 2004, "Anxiety and

- Predictors of Performance in the Foreign Language Classroom,” *System*, (32)1: 21-36.
- Price, M. L., 1991, “The Subjective Experience of Foreign Language Anxiety: Interview with Highly Anxious Students,” Horwitz, E. K. & D. J. Young eds., *Language Anxiety: From Theory and Research to Classroom Implications*, Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice Hall, 101-108.
- Tran. T. T. T. & K. Moni, 2015, “Management of Foreign Language Anxiety: Insiders’ awareness and experiences,” *Cogent Education*, (2):1, (2020年9月22日取得, <https://doi.org/10.1080/2331186X.2014.992593>).

【謝辞】

本アンケートに協力してくださった方々に感謝いたします。また、本稿の執筆にあたって、ご助言を頂きました先生方に、この場を借りてお礼申し上げます。

How Can Students Cope with English Presentation Anxiety? -From the result of survey of Fukuyama City University second-year students-

Yuri GOTO, Yukifumi MAKITA

Abstracts

In a globalized society, there is an increasing need for sharing knowledge and giving opinions in English. Therefore, Fukuyama City University is providing lectures to enhance students' English presentation skills. Students are required to show good speaking skills during presentations. We assume that students have strong foreign language anxieties. The purpose of this paper is to look at ways of alleviating presentation anxiety for Fukuyama City University students. This paper analyzes survey results, especially open-ended questions about advice for other students.

The results showed that students have anxiety when the other person speaks quickly or when they write English sentences. They also felt nervous and anxious when they were not understood during presentations. On the other hand, students felt happy when the audience showed a positive response or when the audience understood their presentations. Moreover, students learned a lot of things from other students' presentations. They also considered that making presentation is good for future study or work. From open-ended questions, 5 categories were formed; the way to cope with anxieties, the importance of a communicative attitude, using plain English and enjoying presentations, being yourself and having confidence. This paper will provide useful suggestions for future presentation lectures.

Keywords : English Communication Anxiety, Presentation

DOI : 10.15096 / UrbanManagement.1303